

「航空環境技術の研究開発」の概要(案)

資料46-2-2

1. 課題実施期間 平成25年度 ～ 平成29(32)年度

2. 研究開発概要・目的

○高効率軽量ファン・タービン技術実証(aFJR)プロジェクト

エンジンのファンおよび低圧タービンの差別化技術の燃費低減性能を実証し、国内メーカーが次の国際共同開発において設計分担を狙えるレベルまで技術成熟度を高める。

○機体騒音低減技術実証(FQUROH)プロジェクト

空港周辺地域の騒音低減のボトルネックになっている高揚力装置および降着装置に対する低騒音化技術を、将来の旅客機開発ならびに装備品開発に適用可能な段階まで成熟度を高める。

上記に加え、航空環境に関する先進技術の研究開発を実施し、次世代超高バイパス比エンジン／次世代国産旅客機における燃料消費低減、排出物低減等の環境性能に訴求する性能要素における優位技術を獲得する。航空機の市場価値を決める技術に対し優位性、競争力を確保し、我が国産業界の国際的発言力の向上に貢献する。

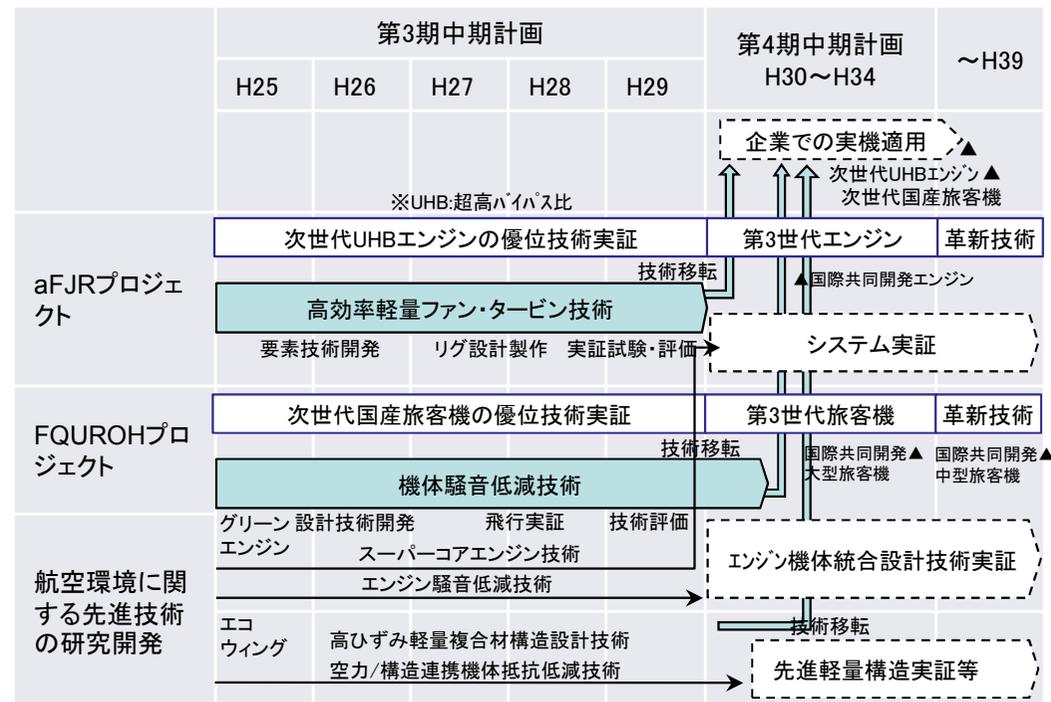
航空輸送の環境負荷を低減する航空科学技術の研究開発に重点投資し、約10年後までに、燃費向上30%以上、離着陸騒音や有害排出物の低減で世界トップレベルの要素技術を確立し、市場競争力のある国産旅客機の開発及び国際共同開発における我が国製造産業の主体的参画に寄与し、持続的で豊かな社会の実現への貢献を通じた日本のプレゼンスの向上と、日本の航空産業の成長に寄与する。

3. 研究開発の必要性等

航空機による旅客輸送量は、今後20年間で約2倍に増加すると見積もられ、それに呼応し航空機も約2倍の33,000機を超えると見られている。一方排出物に対する国際規制は強化される傾向にあり、CO2に関しては、IATA(国際航空輸送協会)では2050年までにCO2排出量を半減するという目標を掲げている。この様な動向の中で、航空機の環境適合性能は航空機の市場価値を決めるものとなっており、環境負荷低減技術の獲得により国際的な競争力強化につながるものである。

- また以下の国の施策に関連し、航空環境技術の研究開発は国として進める必要がある。
- ・経済財政運営と改革の基本方針2014について(骨太の方針):航空産業の振興
 - ・第4期科学技術基本計画:グリーンイノベーションの推進、航空機の高効率化
 - ・航空科学技術に関する研究開発の推進方策:航空輸送におけるエネルギー利用の高効率化及びスマート化、騒音低減等に資する出口指向の研究開発への重点化
 - ・戦略的次世代航空機研究開発ビジョン:「環境適合性」「経済性」の優位技術、ハイインパクト技術
 - ・航空科学技術に関する研究開発の推進のためのロードマップ:我が国の航空産業の国際競争力強化に必要な機体及びエンジン技術

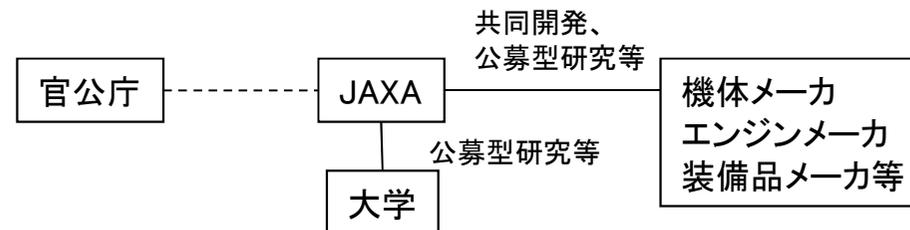
4. 研究開発のロードマップ



5. 予算の変遷(億円)

年度	H25	H26	H27	H28	H29	総額 (見込み)
予算額	10.6	18.1	17.7	(検討中)		(検討中)
(内訳) 運営費交付金	10.6	18.1	17.7	(検討中)		(検討中)

6. 課題実施機関・体制



「航空環境技術の研究開発」のこれまでの成果

航空環境技術の研究開発から2つのプロジェクトがスタート

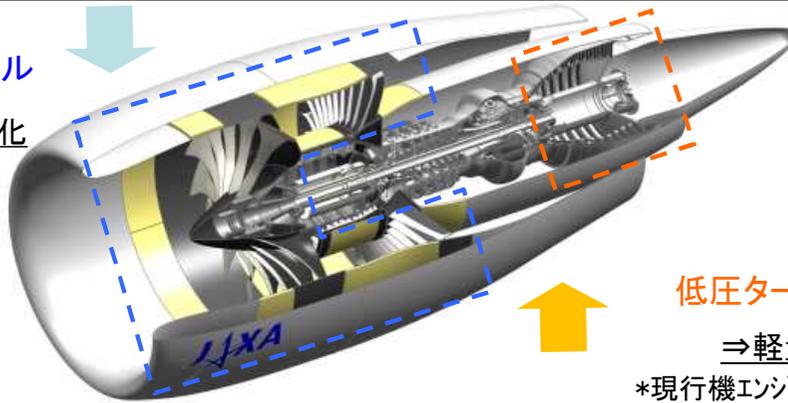
- 高効率軽量ファン・タービン技術実証 (aFJR) プロジェクト【研究開発プロジェクト】
- 機体騒音低減技術の飛行実証 (FQUROH) プロジェクト【研究開発プロジェクト】

● 高効率軽量ファン・タービン技術実証 (aFJR) プロジェクト

【プロジェクトの目的】

- ①ファンの軽量化(0.9%*)を達成する差別化技術を開発・実証する
- ②ファン空力効率の向上(1pt)を達成する差別化技術を開発・実証する

ファンモジュール
⇒高効率・軽量化



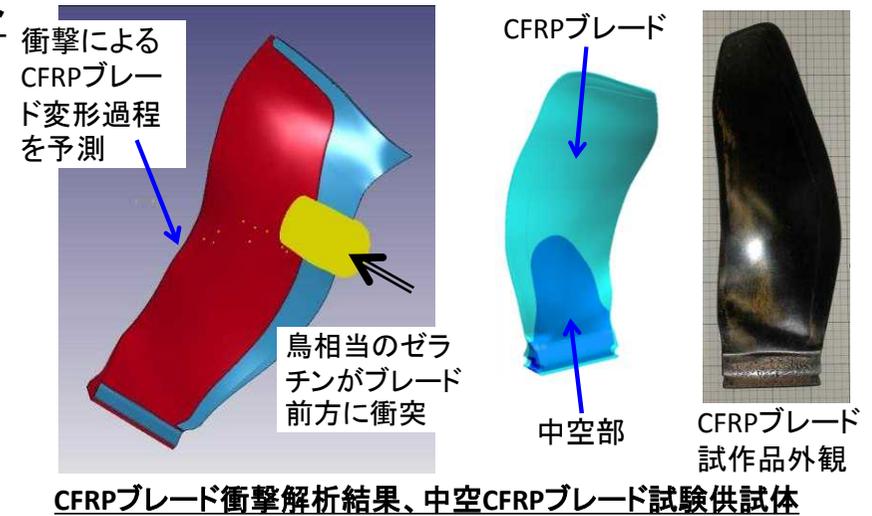
- ③低圧タービンの軽量化(9.1%*)を達成する差別化技術を開発・実証する

*現行機エンジン(V2500)重量比

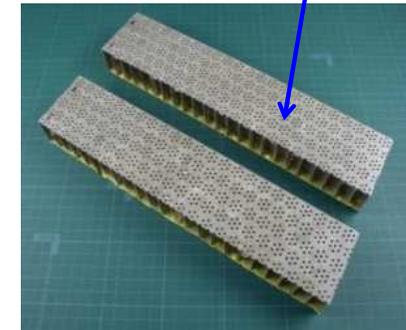
①～③の目標は燃費低減1%に相当し、エアライン(A320シリーズ運航会社)の利益を増加させる効果を有するため、エンジンの市場価値が高まり、国内エンジン産業の生産高の増大が可能となる。

【これまでの成果】

- 高効率軽量ファン及び軽量タービンに関し、モデル試作・試験・解析を行い、軽量化設計の見通しを高めるための基礎データを取得し、低燃費化に資する高効率・軽量化設計の見通しを高めた。



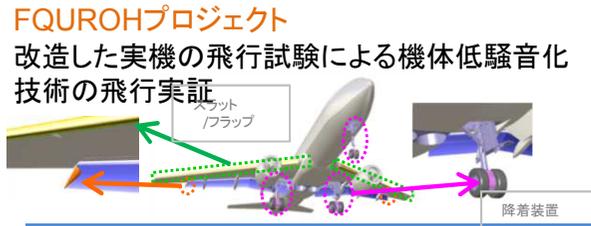
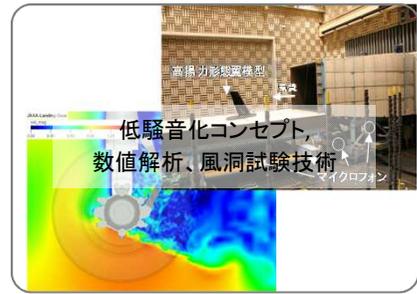
ファン騒音周波数に適合したハニカム形状を一体成形



「航空環境技術の研究開発」のこれまでの成果

●機体騒音低減技術の飛行実証(FQUROH)プロジェクト

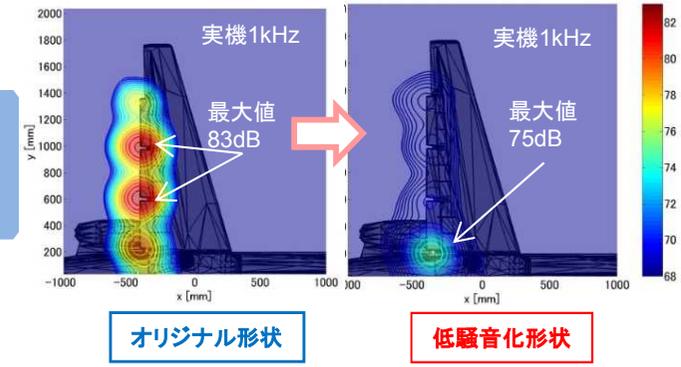
【プロジェクトの目的】



TRL5~6
確立した低騒音性能を実機で引き出す
ための設計技術の獲得
2014~2020年

TRL4
機体騒音低減要素技術開発
2005~2013年

> TRL7
企業での実機開発への
適用へ(企業活動)



低騒音フラップの騒音計測結果

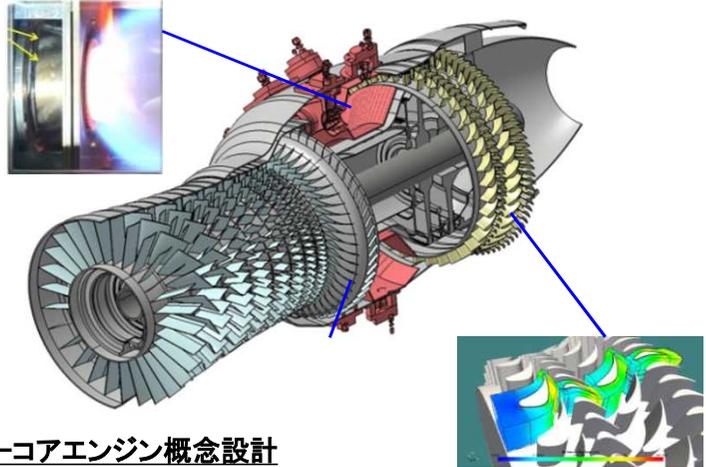
【これまでの成果】

- JAXA実験用ジェット機(飛翔)を用いた飛行実証に向け、高揚力装置および主脚の低騒音化設計を進めた。風洞試験による評価から、世界初となるフラップ騒音低減の実証への見通しを得た。

●航空環境に関する先進技術の研究開発

【これまでの成果】

- エンジンの圧縮機、燃焼器、タービンの空力性能と構造強度を解析し、要素技術を確立した。

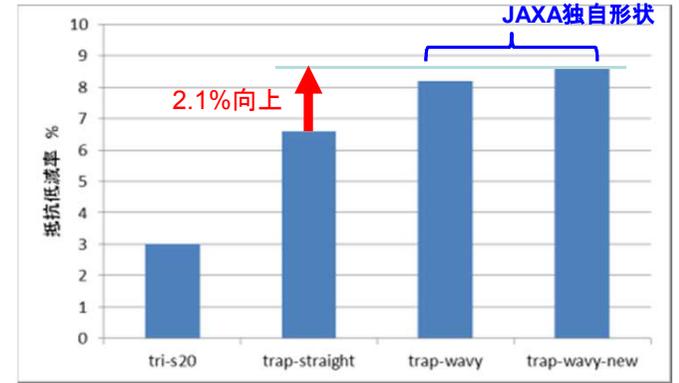


【これまでの成果】

- 表面の微細な凹凸模様により摩擦抵抗を低減する技術(リブレット)に適用可能な設計ツールを構築した。
- 複合材の板厚が変化する部分を軽量化するための工夫を解析・評価する方法を構築した。

異なるリブレット形状による抵抗低減

圧力勾配下での
リブレットの抵抗
係数比較



三角形/直線 台形/直線 台形/波型 /高さ一定 台形/波型 /高さも波型
(25年度成果) (26年度成果)

中間自己点検票

資料 46-2-2

(平成 27 年 5 月現在)

課題名 航空環境技術の研究開発		
評価結果(事前評価)	評価結果(中間評価)	コメント等
<p>(1) 課題の進捗状況</p> <p>「必要性」</p> <p>【科学的・技術的意義】</p> <p>エンジンの高効率化、複合材を活かした翼の高効率化、航空機騒音低減に関する研究開発は、航空機の効率的運航や、航空機の飛行が環境に与える悪影響を低減させることを目指している。これは第4期科学技術基本計画で示された「出口志向の研究開発プロジェクト」「グリーンイノベーション推進」に沿うものである。特に次世代エンジン及び小型旅客機における燃費低減及び低騒音化等の環境性能に訴求する優位技術を獲得する意義は大きく、当技術を重点投資し、世界トップレベルの要素技術に確立することが重要である。</p> <p>【社会的・経済的意義】</p> <p>地球温暖化対策は世界的な課題であるため、特に国際輸送を担うことが多い航空機においてはCO2等の排出量の低減は喫緊の課題である。特に世界の航空輸送量はアジアを中心に高い伸びが見込まれており、我が国の航空輸送における環境負荷低減に対する要請がますます高ま</p>	<p>(1) 課題の進捗状況</p> <p>「必要性」</p> <p>【科学的・技術的意義】</p> <p>エンジンの高効率化、複合材を活かした翼の高効率化、航空機騒音低減に関する研究開発は、航空機の効率的運航や、航空機の飛行が環境に与える悪影響を低減させることを目指している。これは第4期科学技術基本計画で示された「出口志向の研究開発プロジェクト」「グリーンイノベーション推進」に沿うものである。特に次世代エンジン及び小型旅客機における燃費低減及び低騒音化等の環境性能に訴求する優位技術を獲得する意義は大きく、当技術を重点投資し、世界トップレベルの要素技術に確立することが重要である。</p> <p>【社会的・経済的意義】</p> <p>地球温暖化対策は世界的な課題であるため、特に国際輸送を担うことが多い航空機においてはCO2等の排出量の低減は喫緊の課題である。特に世界の航空輸送量はアジアを中心に高い伸びが見込まれており、我が国の航空輸送における環境負荷低減に対する要請がますます高ま</p>	

ることは明らかである。航空環境技術は欧米においても高い目標を掲げて研究開発が実施されている。IATA の2050年までにCO2排出量を半減する目標とも方向性を同じくする。

【国費を用いた研究開発としての意義】

低燃費、低騒音化、排出物低減等についてはこれからますます要求が厳しくなってくると思われ、航空機メーカー、運航者全てに課せられた課題であるが、国内唯一の航空技術の研究機関である JAXA が果たすべき役割は大きい。グリーンエンジン、低騒音化技術、エコウィング技術はいずれも次世代旅客機への実用化が期待され、出口志向の研究開発となっている。これらの技術は、一企業で実施するにはリスクが高いため、国として研究開発をまず進めるべきである。

「有効性」

【新しい知の創出への貢献】

JAXA の優位技術であるシミュレーション技術を応用し飛躍的な軽量化を図る新概念設計や先進複合材の適用に必要な高精度評価により実用化を可能とし、独創性、発展性に優れている。

【研究開発の質の向上への貢献】

ることは明らかである。航空環境技術は欧米においても高い目標を掲げて研究開発が実施されている。IATA の2050年までにCO2排出量を半減する目標とも方向性を同じくする。

【国費を用いた研究開発としての意義】

低燃費、低騒音化、排出物低減等についてはこれからますます要求が厳しくなってくると思われ、航空機メーカー、運航者全てに課せられた課題であるが、国内唯一の航空技術の研究機関である JAXA が果たすべき役割は大きい。[高効率軽量ファン・タービン技術実証 \(aFJR\) プロジェクト](#)、[機体騒音低減技術の飛行実証 \(FQUROH\) プロジェクト](#)、[航空環境に関する先進技術 \(グリーンエンジン技術、エコウィング技術等\)](#) はいずれも次世代旅客機への実用化が期待され、出口志向の研究開発となっている。これらの技術は、一企業で実施するにはリスクが高いため、国として研究開発をまず進めるべきである。

「有効性」

【新しい知の創出への貢献】

JAXA の優位技術であるシミュレーション技術を応用し飛躍的な軽量化を図る新概念設計や先進複合材の適用に必要な高精度評価により実用化を可能とし、独創性、発展性に優れている。

【研究開発の質の向上への貢献】

現状の要素技術では光るものを持っているが、航空エンジン、主翼として仕上げた時に、競争力のある世界に優越する物ができるかという観点からは、更なる体制の強化が必要である。

【実用化・事業化への貢献】

今後10年で、機体の燃費を30%以上向上させることや、離着陸騒音や有害物質排出の低減を目指している。航空機の環境負荷低減は航空機メーカーにおいても注目されている技術である。

この分野は国内メーカー等との共同研究開発、成果の民間への移転が容易な分野と考えられる。

【行政施策への貢献】

第4期科学技術基本計画の「出口志向」「グリーンイノベーション推進」に沿っている。

【人材の育成】

共同研究や公募型研究等を充実させれば、人材開発に資することは明らかである。

現状の要素技術では光るものを持っているが、航空エンジン、主翼として仕上げた時に、競争力のある世界に優越する物ができるかという観点からは、**更なる体制の強化が必要である。**

【実用化・事業化への貢献】

今後10年で、機体の燃費を30%以上向上させることや、離着陸騒音や有害物質排出の低減を目指している。航空機の環境負荷低減は航空機メーカーにおいても注目されている技術である。

この分野は国内メーカー等との共同研究開発、成果の民間への移転が容易な分野と考えられる。

【行政施策への貢献】

第4期科学技術基本計画の出口志向、グリーンイノベーション推進に沿っている。また「航空科学技術に関する研究開発の推進方策について」において、航空輸送におけるエネルギー利用の高効率化及びスマート化、騒音低減等に資する出口指向の研究開発への重点化が提言されている。

【人材の育成】

目標と期限の決まったプロジェクト活動により、各研究者の能力の集約と協働力を高めるとともに、技術実証により机上のアイデアを実証するまでの工学的なセンスを育てる。また各研究者が自身の専門分野を超えて幅広

【知的基盤の整備への貢献】

今や単独の技術革新によって画期的に性能が向上するというのは難しく、様々な要素技術の積み重ねにより航空機全体の低燃費、低騒音化を図ることが現実的であり、グリーンエンジン、低騒音化技術、エコウィング技術等各分野でそれぞれの研究成果をあげ、将来的にエンジン開発、機体設計ともに日本の技術の優位性が確立できるものと期待される。

【見込まれる直接の成果、効果及び波及効果の内容】

本課題は産業競争力育成に繋がることが期待される。特に次世代超高バイパス比エンジン開発は、JAXAにより成熟度が高められた技術がファンタービンシステムに適用されることにより、我が国の国際共同開発におけるバーゲニングパワー獲得、更なるシェア拡大に繋がる。また、次世代小型航空機の開発は、JAXA がシステム実証した低騒音化技術等が差別化技術として適用されることにより、国際競争力のある機体開発などに貢献し、我

い航空分野の知識を深めることで、必要な技術課題の見極めや課題解決力を向上させる。さらに共同研究や公募型研究等を充実させれば、人材開発に資することは明らかである。例えば、aFJR プロジェクトでは基礎研究を進める国内大学と実機開発実績のある国内メーカーとの共同研究体制により、基礎から実用まで俯瞰し鑑定する能力を有する人材育成が見込まれる。

【知的基盤の整備への貢献】

今や単独の技術革新によって画期的に性能が向上するというのは難しく、様々な要素技術の積み重ねにより航空機全体の低燃費、低騒音化を図ることが現実的であり、aFJR プロジェクト、FQUROH プロジェクト、航空環境に関する先進技術等各分野でそれぞれの研究成果をあげ、将来的にエンジン開発、機体設計ともに日本の技術の優位性が確立できるものと期待される。

【見込まれる直接の成果、効果及び波及効果の内容】

本課題は産業競争力育成に繋がることが期待される。aFJR プロジェクトにおいては、JAXA により成熟度が高められた技術がファンタービンシステムに適用されることにより、我が国の国際共同開発におけるバーゲニングパワー獲得、更なるシェア拡大に繋がる。また、FQUROH プロジェクトにおいては、JAXA がシステム実証した低騒音化技術等が差別化技術として適用されることにより、国際競争力のある次世代小型航空機開発などに貢献し、我

が国がリージョナルジェット分野で世界の確固たる地位を占めることに繋がる。

が国がリージョナルジェット分野で世界の確固たる地位を占めることに繋がる。

【これまでの成果】

本研究開発課題については、これまで以下の成果を得ており、目標設定に対して十分な成果が得られつつあり、所定の有効性を示す研究開発が適正に実施されていると判断する。

・ aFJR プロジェクトについては、次世代の超高バイパス比エンジンのファン及び低圧タービンに関し、燃費低減技術に関する実証試験を目指した研究開発計画を明確し、研究開発計画で予定していたモデル試作・試験・解析を行って基礎データを取得し、低燃費化に資する高効率・軽量化設計の見通しを高めた。

・ FQUROH プロジェクトについては、機体騒音低減技術の飛行実証を目指した研究計画を明確にし、JAXA 実験用ジェット機（飛翔）を用いた飛行実証に向け、高揚力装置および主脚の低騒音化設計を進めた。風洞試験による評価から、世界初となるフラップ騒音低減の実証への見通しを得た。

・ 航空環境に関する先進技術の研究開発のうち、グリーンエンジン技術については、窒素酸化物の排出量を低減する燃焼器、騒音を低減する排気ノズル出口形状、燃料消費率を低減する高温／高圧ターボ機械設計技術等の要素技術を確立した。またエコウィング技術については、軽量複合材構造のキーとなる、複雑曲面自動

「効率性」

【計画実施体制の妥当性】

この現実的な課題に対して、共同研究や公募型研究等を通じ、実施機関である JAXA と産業界との連携を主軸とし、大学、官公庁と連携を強化し、JAXA の基盤的能力も含め、我が国全体の技術的能力が大いに活かされる実施体制を構築していくことは優れている。

【目標・達成管理向上方策の妥当性】

積層適用技術、薄層プリプレグ等の研究開発を推進し、軽量化へのインパクトが高い、プライドロップオフ形状についての解析方法を構築した。さらにリブレット・層流翼・モーフィングなどの抵抗低減技術について研究開発を推進し、世界トップレベルの独自リブレット形状を創出し設計手法を構築した。

「効率性」

【計画実施体制の妥当性】

aFJR 及び FQUR0H プロジェクトについては、JAXA 内にプロジェクトチームが設置され、一定の期間内において目標を達成するための適切な体制が構築されていると判断する。また、共同研究や公募型研究等を通じ、実施機関である JAXA と産業界との連携を主軸とし、大学、官公庁と連携を強化し、JAXA の基盤的能力も含め、我が国全体の技術的能力が大いに活かされる実施体制が構築されていると判断する。例えば、

・aFJR プロジェクトについては、JAXA と国内メーカー (IHI) および国内大学 (東京大学、筑波大学、金沢工業大学) という体制となっている。

・FQUR0H プロジェクトについては、JAXA と航空機・装備品メーカー 3 社が一同に参画する共同研究体制により、実用化のため技術力の集約を図れる体制となっている。

【目標・達成管理向上方策の妥当性】

ICAO 等世界的な動向に応じて、計画等に関して柔軟性を持って対応することが必要である。

【費用構造や費用対効果向上方策の妥当性】

限られたリソースで日本のプレゼンスの向上と航空産業の成長に効率的に寄与するため、10年20年先を見据えた優位性のあるグリーンエンジン、低騒音化、エコウイングの三部門に整理し重点投資している。

【研究開発の手段やアプローチの妥当性】

適切な予算規模を考慮しつつ実機地上試験や飛行実証試験の実施を推進し、システム技術の実証と設計技術を確立することは研究開発のアプローチとしては優れている。一方、近い将来の航空機産業の国際競争力向上を意図するならば、各技術をシステムティックにインテグレートする知的基盤が無い等、日本の航空産業の問題点の認識をし、その解決に向けての方策を積極的に取り入れるべきである。

ICAO 等世界的な動向に応じて、計画等に関して柔軟性を持って対応することが必要である。

【費用構造や費用対効果向上方策の妥当性】

限られたリソースで日本のプレゼンスの向上と航空産業の成長に効率的に寄与するため、10年20年先を見据えた優位性のある [aFJR プロジェクト](#)、[FQUROH プロジェクト](#)に優先的に着手し、[次いで重要な技術ではあるが日本として保有していない先進技術に重点投資している。](#)
[また aFJR プロジェクト、FQUROH プロジェクトでは、企業と責任分担に応じて資金分担する、これまでにない効率的な費用構造となっている。](#)

【研究開発の手段やアプローチの妥当性】

適切な予算規模を考慮しつつ実機地上試験や飛行実証試験の実施を推進し、システム技術の実証と設計技術を確立することは研究開発のアプローチとしては優れている。一方、近い将来の航空機産業の国際競争力向上を意図するならば、各技術をシステムティックにインテグレートする知的基盤が無い等、日本の航空産業の問題点の認識をし、その解決に向けての方策を積極的に取り入れるべきである。

【ロードマップ】

[以下の通り、産業界及びユーザーのニーズ等を考慮したロードマップを設定し、その進行・進捗の確認につい](#)

ても JAXA 内部における評価等を含め、組織的に管理することとしており妥当である。

・ aFJR プロジェクト

平成 25 年度：燃費低減に関する実証試験を目指した研究開発計画を明確にした。

平成 26 年度：モデル試作・試験・解析による基礎データを得た。

平成 27 年度：モデル改良・試験・解析により基礎データを得る。

平成 28 年度：基礎データに基づいて供試体の設計製作に着手する。

平成 29 年度：ファンおよび低圧タービンの供試体を用いた実証試験を実施する。

・ FQUROH プロジェクト

平成 25 年度：機体騒音低減技術の飛行実証を目指した研究開発計画を明確にした。

平成 26 年度：飛翔の高揚力装置低騒音化の風洞試験データを取得した。

平成 27 年度：風洞試験データ取得、飛翔の改造設計を実施し騒音計測技術を改良する。

平成 28 年度：飛翔による飛行実証（予備試験）及び低騒音化改良設計を実施する。

平成 29 年度：飛翔による飛行実証（本試験）及び MRJ の低騒音化設計に着手する。

・ 航空環境に関する先進技術の研究開発（グリーンエンジン）

平成 25 年度：低排出燃焼器等のエンジン要素設計／試
作を進めた。

平成 26 年度：要素実験を行うとともに技術実証用エン
ジンの設計仕様を設定した。

平成 27 年度：要素技術実証とともに技術実証用エンジ
ンの基本設計を開始する。

平成 28 年度：要素技術実証とともに技術実証用エンジ
ンの要素性能評価を行う。

平成 29 年度：要素技術実証と技術実証用エンジンの基
本設計を完了する。

(エコウィング)

平成 25 年度：薄層化材料開発、抵抗低減要素技術検討
を行った。

平成 26 年度：軽量化設計および低抵抗設計技術を構築
した。

平成 27 年度：構造および空力の要素設計を行う。

平成 28 年度：構造要素供試体および空力風洞試験供試
体を製作する。

平成 29 年度：軽量化設計および低抵抗機体設計の評価
試験を実施する。

【資金計画】

平成 25～27 年度：46.4 億円

欧米においても航空機の環境技術に関する取り組みは
加速しており、研究開発に多額の投資がなされている。
本研究開発の総予算規模については、JAXA がこれまでに

生み出した成果等に鑑みると、現時点において資金計画は妥当であると判断する。

(2) 各観点の再評価と今後の研究開発の方向性

「必要性の再評価」

世界の航空旅客数については今後20年で2.5倍に増加すると予測されており、航空交通の需要はますます伸びることが予想される。今後の航空輸送量の増大や世界的な環境問題に対する取り組みの高まりから、環境規制は一層強化される傾向にあり、環境技術の必要性はさらに高まっていると判断する。航空機のCO2排出規制については、CAEP9(2013年2月)でCO2の規制指標と規制案の原案(Annex 16, Vol. III)が承認されたところ。規制のレベルや施行時期、規制対象、規制に向けた体制がCAEP10(2016年2月)に合意され、2020年から施行できるようJAXAも参加して活発な活動が進められており、aFJRプロジェクトが目指すCO2削減技術(燃費低減技術)が次世代航空機開発(EIS2025年頃)にとって必須のものになる見込みである。騒音規制についてはCAEP/9(2013年2月)において、新型機への騒音規制強化(Chapter14)とその適用時期が合意された。排気ガス関係では、PM(粒状物質)に関して、これまでのフィルタ方式のスモーク数からPMの重量および数密度に規制方法を変換していくことがCAEP10で合意される見通しであるため、JAXAでもそれに応じてPMの測定方法の変更を進めている。

「有効性の再評価」

骨太方針「経済財政運営と改革の基本方針 2014 について」で求められている「航空産業の振興」に貢献するものである。また「戦略的次世代航空機研究開発ビジョン（文部科学省）」では、「航空機産業は関係省庁の連携の下で国が主導し、牽引すべき産業分野であると考える。」とし、JAXA の役割として、「航空機産業の発展に資するため、先進的な航空科学技術に関する研究開発の面から課題に取り組むこと」が求められている。またビジョンの「民間航空機国産化研究開発プログラム」において必須の課題とされている「環境適合性」「経済性」に対応する技術開発である。さらに「航空科学技術に関する研究開発の推進のためのロードマップ（文部科学省）」における我が国の航空産業の国際競争力強化に必要な機体及びエンジン技術に対応している。本研究開発課題では、これらの目標に合わせた研究開発計画を立てていることから、本研究開発の目標の有効性は維持されているものと判断する。

「効率性の再評価」

aFJR 及び FQUR0H プロジェクトについては、JAXA 内にプロジェクトチームが設置され、一定の期間内において目標を達成するための適切な体制が構築され、より効率的な体制となっていると判断する。また産学官の広範囲な連携はその実績を認めるとともに今後も積極的に進め

るべきである。

「今後の研究開発の方向性」

航空機の高いレベルの環境技術の獲得は、エネルギー消費量削減を可能とする技術であるだけでなく、航空機産業の国際競争力の強化にとって重要であり、国が主体的に研究開発を進める意義がある。文部科学省は戦略的次世代航空機研究開発ビジョンの実現に向け、エンジン技術の地上実証に必要な大型試験設備として、防衛省のF7 エンジンおよびそれを運転する試験設備改修について、予算獲得を進めている。機体技術に対するジェットFTB 等と同様に、エンジン技術についてもシステムレベルの技術成熟度を獲得することが可能となる見込みであり、国内連携によりこのエンジンを活用した活動にも力を注ぐ必要がある。

上記の項目・基準に基づき、課題の「継続」が妥当であると判断する。

(3) 総合評価

【実施の可否の別とその理由】

本課題は上記の理由により第4期科学技術基本計画に沿った意義のある研究開発であり実施可とする。

【中間評価・事後評価の実施時期】

平成27年度 中間評価 平成30年度 事後評価

(3) その他

【今後研究を進める上での注意点】

- ・ より使用できる技術であるために、システムティック・インテグレーションを意識してバランスのとれた要素技術開発を心がけ、航空機全機開発の中でのエンジンや翼技術の向上を目指す必要がある。そのため、安全技術とも一体化させ「環境に配慮し安全な新世代国産航空機」を究極の目標とすべきである。
- ・ 本課題で開発された技術が実用化されるためには、大型の試験設備が必須と考えられ、必要な基盤設備の拡充に関するロードマップを整備し明示すべきである。
- ・ 複合材料の導入にあたっては関連組織との連携が一層望まれる。